

ellipse

[エリプス]

TOPICS

お茶の水学術事業会設立 20 周年記念特別寄稿

「お茶の水女子大学の教育・研究環境整備

～学ぶ意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する～

(1) 国立女子大学の意義と女性たちの活躍を支えるための環境整備

室伏きみ子 氏

楕円(ellipse)には焦点がふたつあります。男性中心の社会から、女性と男性がそれぞれに中心(焦点)となる社会を目指すという思いを込めて、誌名を「エリプス」と名づけました。



ワ・タ・シ

深津千鶴 FUKATSU, Chizu イラストレーター
東京生まれ。1988年、お茶の水女子大学文教育学部地理学科卒業。在学中に、『週刊朝日』誌上にて「山藤章二の似顔絵塾」特待生となる。広告代理店勤務を経て、1990年より作家活動を開始。書籍装画、CDジャケットなど多く手がける一方、エッセイ執筆、壁画制作などの活動を展開している。



特定非営利活動法人
お茶の水学術事業会

REPORT

夢のつばさ♥プロジェクトニュース

INFORMATION

イベント情報
事務局よりお知らせ

お茶の水学術事業会設立20周年記念特別寄稿

お茶の水女子大学の教育・研究環境整備

～学ぶ意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する～

(1) 国立女子大学の意義と女性たちの活躍を支えるための環境整備

室伏きみ子(むろふしきみこ)



【プロフィール】

お茶の水女子大学・同大学院修士課程修了、東京大学大学院博士課程修了、医学博士

お茶の水女子大学名誉教授、第16代学長(2015年4月—2021年3月)

「夢のつばさプロジェクト」企画担当、お茶の水学術事業会会員(元・理事)

日本学術会議会員、日本医療研究開発機構監事、NHK経営委員/監査委員、文部科学省科学技術・学術審議会委員/中央教育審議会委員、経済産業省産業構造審議会委員/独立行政法人評価委員会委員、内閣府男女共同参画会議議員、(株)プリヂェストン社外取締役などを歴任。フランス共和国教育功労章受章、文部科学大臣表彰科学技術賞受賞、男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰受賞、ストラスブール大学名誉博士

はじめに

特定非営利活動法人(NPO法人)お茶の水学術事業会(以降「事業会」と記載)が設立20周年を迎えられましたこと、心からお祝い申し上げます。同時に、事業会を支え、価値ある活動を重ねて来られた皆さまに感謝申し上げます。

事業会の創設当時、私は、国立大学の法人化を前にしてお茶の水女子大学初の女性学長になられた本田和子(ますこ)先生の下で、理学部長を務めていました。そして、本田学長と篠塚英子教授(後に人事院人事官等を歴任されました)を中心に、大学の様々な事業を支援すると共に外部資金を呼び込むための組織として事業会が組織される様子を、傍らで見せて頂きました。当時のお茶の水女子大学は、積極的に外部資金を導入する手立てを持ちませんでしたので、事業会設立は困難な状況下で課題を解決するための有効な方策であり、画期的な出来事でした。

その後私は、本田学長の下で理事・副学長として、国からの大型資金の獲得や、民間からの資金導入、海外との連携などを担当しましたが、事業会の設立から学んだ事柄が大いに参考になりました。事業会のお仕事も、理事として数年間お手伝いしましたが、学長就任と同時に直接の活動から離れました。ただ、2011年の東日本大震災に際して、親しい友人たちと共に開始した、遺児・孤児の居場所づくりの活動「夢のつばさプロジェクト」の活動拠点を、事業会に置いて頂き、多くの個人や企業・団体からのご協力を頂いて、13年に亘って活動を続けています(<https://www.npo-ochanomizu.org/tsubasa/>)。その様子は、「ellipse」でも報告しておりますので、ご覧頂けますと幸いです。

また、折々に、講演会、シンポジウム、フォーラムなどの活動の記録を、「お茶の水ブックレット」として出版して頂きました。学長退任に当たって、後輩や教え子たちが開催に尽力して下さったシンポジウムの記録も、ブックレット12「グローバルリーダーとは—今、そして未来に向けて—」として、まとめて頂きました。

20年に亘るお付き合いの中で、事業会にはとても助けて頂きました。そのようなご縁もあり、このたび20周年を記念して、「ellipse」で特集を組むことについてのご提案があり、2023年に発行される60、61、62号に「お茶の水女子大学の教育・研究環境の整備」に関して、私が、145年余りのお茶の水の歴史の3分の1以上に当たる50年の歳月を、生徒・学生・教員・学長として過ごす中で経験してきた事柄について、事業会を支援して下さっている皆さまに、お伝えすることになりました。(1)国立女子大学の意義と女性たちの活躍を支えるための環境整備、(2)オールお茶の水体制の構築と財政基盤の確立、(3)社会の要請に応える新たな教育・研究組織の構築、の3つのテーマに沿って、私が実際に関わって来たことを中心に、裏話や苦労話なども交えて、読者の皆様にお届けします。

お茶の水ブックレット12
(2022年3月1日発行)

国立大学の法人化とは？

2004年の国立大学法人化によって、国立大学の運命が大きく変わりました。第二次世界大戦後の1947年に施行された「学校教育法」と、1949年に施行された「国立学校設置法」に基づいて設置されたのが、新制国立大学でしたから、55年ぶりの大きな変革でした。

国としての負債が1,200兆円を超え、財政が年々厳しくなる中で、2000年前後から「国立大学も合理化の対象とすべき」との議論が高まっていました。行政改革の一環として、「民営化も視野に入れて、国立大学の在り方を考え直すべき」との有識者会議等の主張があり、様々な議論を経た結果、2004年4月に、99の国立大学が文部科学省から独立して86の「国立大学法人」となったのです。

議論の過程では、国立大学の学長で組織される「国立大学協会」や各大学からの強い要請があり、また、法人化による中規模・小規模大学の教育と研究の弱体化を避けたい文部科学省の意向もあって、何とか民営化は避けられましたが、財務省の審議会から「国立大学の教職員を非公務員として、国からの予算配分を削減する」という案が示されました。2003年に制定された国立大学法人法には、「国立大学の教育研究に対して十分な財政保障をする必要がある」という付帯決議が付いたのですが、その後の運用において付帯決議はほぼ反故にされ、国からの予算（運営費交付金と呼びます）が毎年1%強削減されることになりました。国立大学全体に配分される運営費交付金は総額1兆1,000億円程度ですから、毎年110億円以上が削減されることになり、予算上では、国立大学が毎年一つずつ減っていく計算になります。予算も人員も余裕がある旧・帝国大学などでは、それほど影響が大きくなるはずですが、お茶の水のように基盤的な運営費交付金が45億円程度でギリギリの運営をしていた小さな大学にとっては、この予算削減は死活問題でした。授業料等の学生納付金を引き上げることはできるだけ避けたいですし、外部資金の導入を図ることも簡単ではありません。お茶の水には、大型の外部資金が入って来る学部（工学部・医学部・薬学部等）も研究組織もありませんでしたから、法人化後に本田学長の跡を継いだお二人の学長は、大変ご苦労されたようでした。予算の削減を、人件費の削減（教職員の削減）で対応して来たために、それからの10年間で、大学の教職員数が4分の3までに減少してしまいました。この件については、次号で詳しく述べます。

子育て支援策から始めよう

— 学内保育所の設置に向けて —

若い女性研究者たちが夢を持って多様な分野で活躍する上

で、出産と育児が制約となることが少なくありません。女性たちが家庭を持ち、子どもを産んでも仕事を継続するためには、周囲の協力と環境整備が不可欠です。

私たちは、法人化に向けて改革を進める中で、女性研究者や学生たちの子育てを支援するために、学内に保育所を作りました。学内に保育所があれば、意欲ある女性たちが、途中で諦めることなく研究や教育活動が続けることができるはずです。現在では、大学や研究機関に保育所を設置する事が当たり前になりつつあり、政府も積極的に支援していますが、当時は様々な障壁があって、簡単には進みませんでした。

学内保育所を作ろうとの想いを持ったきっかけは、1999年に、日本学会会議の細胞生物学研究連絡委員会で、群馬大学の方から「病院付設の保育所の増築を検討しているが、予算の捻出に困っている」とお聞きしたことでした。「国立の女子大学として女子教育の先頭に立つはずのお茶の水女子大学に、なぜ若い女性たちを支援するための保育所がないのだろうか」と素朴な疑問を持った私は、「子育て支援のための保育所を作りませんか」と周囲に呼び掛けました。ところが「保育所は厚生省（現・厚生労働省）傘下の施設であるから、厚生省と関係のないお茶の水に保育所を作るのは無理な話」とか、「居住地から離れた大学内に保育所を作っても役に立たない」などと反対される方や、全く無関心な方が多かったのです。

その中で、理学部の評議員だった松本勲武（いさむ）教授が賛同して下さって、すぐに当時の佐藤保学長にご相談に伺うことになりました。佐藤学長は「これまでも提案はあったようですが、いつも立ち消えになっていました。立ち消えになった原因と、他の国立大学の現状を調査して下さい」とおっしゃいました。そこで力を得た私たちは、全国の99の国立大学（当時）に電話をかけて、保育所についての情報を集めました。「お宅には医学部も病院もないのだから保育所設置など無理ですよ」と、けんもほろろに電話を切られたこともありましたが、多くの大学の方々が親切に対応して下さいました。特に、北海道大学の厚生課の方や、金沢大学の厚生課の方と保育園長さんのご親切な対応は、今でも忘れられません。その後、生物学科助手の西川恵子さんにお手伝い頂きながらまとめた資料を各大学に送って、間違いや誤解を訂正して頂き、時間はかかりましたが、最終的に大部の調査報告書を作り上げることができました。当時の関係者の皆さまに、改めて御礼申し上げたく思います。

佐藤学長はその報告を国立大学協会での議論に供して下さい（国大協「国立大学における男女共同参画を推進するために」報告書2000年）、学内に「保育施設に関する調査研究会」を、次いで「設置準備委員会」を組織して下さいました。私の研究室の若い研究者や学生たちの協力で全学的なアンケー

ト調査も実施して、学内の需要や要望も調べ上げ、同じ問題意識を持った内田伸子教授、小谷眞男助教授等、数名の教職員の方々に参加して頂いて、準備委員会で具体的な案を練り始めました。幸いにも時を同じくして文部省（現・文部科学省）が「霞ヶ関保育所」を作る計画を公表し、その動きが後押しになって「無理だ」との意見は鳴りを潜めました。

そして、2001年4月に佐藤学長からバトンを引き継がれた本田和子学長は、保育所設置に熱心に取り組んで下さいました。まず、授乳とオムツ替えができる明るい授乳室ができ上がり、(株)サンリオから寄付して頂いた可愛いベッド・ソファ・布団などが設置されました。赤ちゃんを連れて来ても、安心して授乳やオムツ替えができる部屋が出来たことは、若い母親たちにとっても喜ばれました。本田学長は児童学（子ども学）がご専門だったこともあって、「幼・保連携」の方針をお持ちでしたので、幼稚園の空き部屋を利用して保育施設を設置することについての検討が始まりました。当時の幼稚園長（女性の方ですが…）から、「歴史ある大事な幼稚園の中に保育施設などを作るとは何か！」と大声で叱責されたことにはビックリしましたが、幼稚園の先生方が協力して下さい、本田学長と当時の附属学校部長の石川宏教授が園長を説得して下さい、2002年に幼稚園の一角に「いずみ保育所」ができ上がりました（「いずみ」には「成長の源」の意味が込められています）。病院を持たない国立大学で初めての保育所でした。安全な赤ちゃん用の家具や布団などは(株)サンリオから、また玩具は(株)ベネッセコーポレーションからご寄付頂き、いかにも可愛い「赤ちゃんたちのための部屋」ができ上がりました。2004年には、本田学長のご指示の下、乏しい学内予算をやりくりして、職員宿舎の一部を改装した新しい保育施設ができ上がり、さらに経営の安定化のために、2005年度からは大学附属の「いずみナーサリー」として開所の運びとなりました。そして、保育所作りに協力して下さい、牧野カヅコ教授が、初代園長を引き受けて下さいました。

現在も、熱心な保育士さんたちによる保育プログラムの中で、学生・大学院生・教職員の子もたちが、いずみナーサリーで育っています。幼稚園から大学院までが同じキャンパスに設置されているお茶の水女子大学にナーサリーが加わり、『赤ちゃんがいるキャンパス』は、様々な年齢の人々が触れ合う機会を創り、若い学生たちや附属学校の生徒たちにとっても、貴重な学びの場となりました。



いずみナーサリー（2012年撮影：お茶の水学術事業会）

今では珍しいことではなくなりましたが、設立当時から、「いずみ」で子育てをしている学部生と大学院生には、保育料の半額を奨学金として授与する仕組みもつくりました。某企業の経営者の方は、この仕組みを「他にはない素晴らしい制度」とおっしゃって、いろいろな場で経済界や行政の皆さまにご紹介下さいました。

なお、この時期に私と一緒に活動してくれた佐々木成江博士（現・本学特任教授）が「いずみ」で子育てをし、その後、名古屋大学に異動して、教育・研究のみならず、学童保育所の設置など、子育て支援・女性科学者支援の活動において先導的な役割を果たしたのは、とても嬉しい副産物でした。

いずみナーサリー設立から10年余を経て、2016年4月に、文京区との連携で「認定子ども園」を学内に設置しました。それを機に、同窓会からのご寄付を利用して、それまで活用されていなかった中庭を、ナーサリーと子ども園の子もたちの遊び場として整備しました。

様々な形態の幼児教育施設をひとつのキャンパスに備えたお茶の水は、子どもたちに豊かな教育環境を作るための保育と幼児教育の研究と実践の場として、今日まで社会に向けた貢献を続けています。

国立女子大学不要論とアフガニスタン女子教育支援

法人化を控えていた頃、社会では「女子大学の役割は終わった」とか、「いくらでも私立の女子大学があるのだから、



「ellipse」4号（2004年5月発行）には「いずみ保育所—大学の中に赤ちゃんがいる—」という特集記事が掲載されている（https://www.npo-ochanomizu.org/ellipse/ellipse_04.pdf）。

国立の女子大学は不要だ」といった意見が少なくなく、他大学との合併案も取り沙汰されていました。そんな状況下で、2001年に、本田和子先生が学長に就任されました。創立126年の歴史の中で初の女性学長でした。

どんなに大変な時でも、本田学長はいつもユーモアを忘れずに、多様な課題に対応されていました。就任されて間もなく、「幕引きをするのなら、卒業生である私に・・・ということで、私が学長に選ばれたのでしょうか。もし幕引きもやむなしと言うことになったら、文科省には、素晴らしい緞帳を用意して頂かなければね・・・」とニコニコしながら仰ったことが昨日のように思い起こされます。

そして、本田学長の下で掲げられた「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する」とのミッションは、今日に至るまで、お茶の水の全ての活動の根幹を成すものとなっています。

本田学長は、国会の文教委員会に招聘されて、国立大学の法人化や国立女子大学の在り方についての意見を求められたのですが、社会に渦巻いていた「国立女子大学不要論」に対して、国立の女子大学が果たすべき役割を明確に示されたので、意地悪な(?)質問を用意していたらしい国会議員たちもたじたじだったようです。

さらに、当時の遠山敦子文部科学大臣と会談された際には、「お茶の水は、日本の女子教育のみならず、学びたくても学ぶことのできない開発途上国の女性たちの教育にも協力を惜しまない大学であるべき」との決意を表明されました。そして、当時日本が教育支援に乗り出そうとしていたアフガニスタンの女子教育支援において、本学が中心的な役割を担うことを引き受けられました。この会談には、現在事業会の理事長としてご活躍の平野由紀子教授(当時 研究科長)と私(当時 理学部長、翌年から国際・研究担当 理事・副学長)が同席していたのですが、本田学長が冷静に将来を見据えて、思い切った決断をされる様子から、真のリーダーの在り方を学ばせて頂きました。

大学に戻ってから、賛否両論が渦巻きましたが、特に女性教員たちは本田学長の決断を支持し、体制作り奔走しました。附属高等学校長を務めていらした藤枝修子教授を中心に、附属の教職員の方々も加わって、具体的な活動に向けた計画が練られました。

それから間もなく、本田学長の呼び掛けに、津田塾大学(志村尚子学長)、東京女子大学(湊晶子学長)、奈良女子大学(丹羽雅子学長)、日本女子大学(後藤祥子学長)が賛同し、2002年に、アフガニスタンの女子教育の復興に協力するための「五女子大学コンソーシアム」が組織されました。この時の学長が全員女性であったことは、女性リーダーが率いる女子大学の社会的価値と存在意義を社会に示すことにもなり、



2002年 五女子大学コンソーシアム協定締結
(左から 志村学長、本田学長、湊学長、丹羽学長、後藤学長)

「国立女子大学不要論」はいつの間にか鳴りを潜めました。

その後、五女子大学コンソーシアムは、18年余に亘って、アフガニスタンからの留学生の教育や女性教員たちの研修、学校経営者の研修において成果を挙げて来ましたが、国の要請が自然科学分野における女性の育成にあったようで、留学生たちは化学、生物、食物を専攻する理系の学生ばかりでしたが、それぞれ修士や博士学位を取得して母国へ戻り、大学の教員や政府機関の教育部門で活躍しました。2017年に開催した「アフガニスタン女子教育支援 15周年記念公開シンポジウム ～ 支援の歩みと現状」では、在学生のプレゼンテーションに加えて、アフガニスタンからビデオメッセージが届きました。母国へ戻った彼女たちが、後進の育成のために教鞭を執っている姿を見て、胸が熱くなったことが思い出されます。ただ、残念なことに、2020年初頭から2021年8月にかけて実施された米軍の撤退に伴って、アフガニスタン国内の混乱が拡大してタリバンが政権に復帰してからは、女性たちが学ぶことも活躍することも困難になりました。卒業生たちのことが心配ですが、留学生たちの指導に熱心に取り組まれた森義仁教授によりますと、現在、殆どの人たちが国外に出て、仕事を続けているとのことでした。

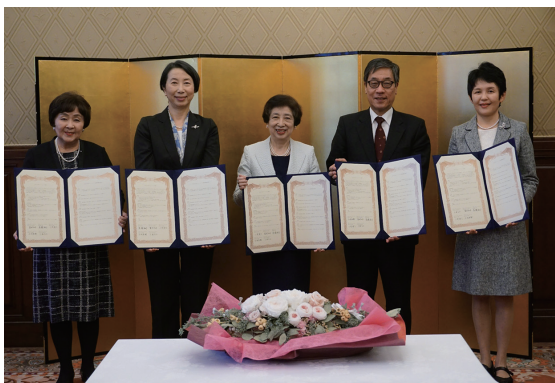
一日も早くアフガニスタンに平和と正常な生活が戻って、彼女たちが母国の教育や研究の場で活躍できる日が来ることを心から祈っています。



研修生や留学生とのセミナー



カプール大学からの訪問者（学部長、学科主任）とプログラム担当教員達



2017年 協定更新 & 15周年記念シンポジウム
 (左から 室伏氏、津田塾大学・高橋裕子学長、東京女子大学・小野祥子学長、奈良女子大学・今岡春樹学長、日本女子大学・大場昌子学長代行)

お茶の水女子大学における ジェンダー平等実現への取り組み



日本初の女性理学博士
 保井(やすい)コノ女史
 (「卒業記念写真帖」(大正3年3月) 資料提供:お茶の水女子大学)

全ての女性に学びの場を提供して優れた女性人材を育て、社会に輩出することに努めて来たお茶の水女子大学の想いは、卒業生たちの心の中に根付いており、多くの同窓生が国の内外で教育者・研究者・公務員・報道関係者・多様な分野での企業人等として活躍しています。

お茶の水で学ぶ女性たちは、社会に根強く残っている「無意識の偏見(アンコンシャス・

バイアス)」から解放たれて、「女性だからダメ」などと言われることなく、自由に進路を選択できる生活を送っているように見受けられます。

「ジェンダー」とか「ジェンダー平等」という言葉を聞いたことがなかった頃から、お茶の水では、女性たちがその資

質・能力を十分に発揮できるように、そして、不平等や不正を乗り越えて社会の中で活躍できるようにとの想いの下で、学びの場を構築するための努力がなされて来ました。そのひとつの事例をご紹介します。

1967年に、当時の藤田健治学長の提唱によって「お茶の水女子大学資料室(資料室)」が設置され、女子教育の歴史や研究に関する資料収集が始まりました。本学における「女性学」研究と教育の曙でした。この頃私は、お茶の水女子大学の1年生でしたが、附属高校の生徒だった頃から、入学式や卒業式などで藤田学長のお話をお聞きして来た経緯もあり、附属の先生方からもこの資料室の計画についてお聞きしていたので、何となく記憶に残っていました。

この資料室は1975年に「お茶の水女子大学女性文化資料館(通称:女性文化資料館)」へと発展的に改組されるまでの8年間に亘って継続されて、内外からの女子教育に関する照会に対応して資料提供を行って来ました。資料室の仕事は心ある教員たちが交代で担当していたようで、1975年になって、やっと助手相当の人員が一人配置されたと聞いています。生物学科でお世話になった清水碩(せき)教授が、長く室長や館長を務めていらしたこともあって、清水教授のファンだった私たち学生も、学部および大学院修士課程の学生の頃に、清水教授が資料室・資料館の書類整理などをなさるお手伝いをしたことを覚えています。既に述べたとおり、当時は「ジェンダー」という言葉を聞いた覚えもなく、自分自身が後に関わることになろうとは思っていませんでした。

その後、私は、東京大学大学院博士課程に進学し、ニューヨークでのポストドク生活や私学での勤務などを経て、1983年に助手としてお茶の水女子大学に戻って来ました。学生時代の指導教官としてお世話になった太田次郎教授に呼び戻して頂いたのですが、私が戻ったのは、元々、わが国初の女性理学博士であり、女子高等師範学校を新制大学にするために尽力された保井コノ教授が主宰されていた研究室で、太田教授が二代目、そして私は光栄なことに三代目に当たります。お二方に恥ずかしくないような研究者・教育者にならなければと思ったものでした。

太田教授は、私が大学に戻った頃、何代目かの女性文化資料館の館長をお務めで、毎年の報告書作成にも熱心に取り組まれていました。当時も、館長は教授が交代で(ボランティアで)務めていて、館長・助手・事務補佐の3名体制で運営していたと記憶しています。私も時々お手伝いさせて頂いていましたが、その後1986年に、藤巻正生(まさお)学長の方針で「女性文化研究センター」に改組され、独立した組織として国からの予算も獲得でき、専任のセンター長やセンター員が置かれる様になりました。さらに、1996年に太田次郎学長の下で、国際的なジェンダー研究を目指す「ジェン

「ジェンダー研究センター」となり、翌1997年には、佐藤保学長の下で、大学院博士前期課程に「開発・ジェンダー論コース」が設置されました。そして、本田学長のご指導の下、2003年に21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」が採択されました。このプログラムには、学内、学外の優れた研究者が参画され、その成果が、本学大学院の博士前期課程ジェンダー社会科学専攻、博士後期課程ジェンダー学際研究専攻の設置に結びつきました。

さらに、私が学長に就任して創立140周年を迎えた2015年に、ジェンダー研究と教育をさらに発展させるために、「ジェンダー研究センター」を「ジェンダー研究所」に格上げ改組して、新たに「グローバル女性リーダー研究所」を創設し、両研究所から成る「グローバル女性リーダー育成研究機構」を設立しました。国からの支援によって、予算と人員も増やすことができ、日本の社会におけるジェンダー平等の実現とグローバルに活躍する人材の育成に向けて取り組みを進めて来ました。

1967年の資料室の設置から56年の歴史の中で、多くの優れたジェンダー研究者が活躍し、学生たちを育てて来まし

た。1990年代初頭からは、日本学術会議の会員でもいらっしやった原ひろ子教授、島田淳子(あつこ)教授、袖井孝子教授を中心に、大学内だけでなく、学術会議会員と研究連絡委員会委員(現・連携会員)で組織されたJAICOWS(女性科学研究者の環境改善に関する懇談会)を拠点として、日本全体のジェンダー平等の実現のための活動が続けられて来ました。そういった環境下で、お茶の水の学生たちは、入学直後からジェンダー平等やダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン(DE&I)などに関する講義を受けています。国内外の優れた女性研究者・教育者の講演を聴講する機会も多く、文系・理系を問わずジェンダー研究の一端にも触れることができますので、学生たちの思索の幅を広げる上で、大きな効果を生んでいます。また、学生たちの心の底に潜んでいる無意識の偏見の払拭にもつながり、性別、人種、文化、宗教などの違いを超えて、全ての人が互いに尊重しあい、理解しあうことの重要性を、当然のことと捉えるようになっていくようです。

※文中の職位は当時のもの

お茶大女性リーダー育成塾：^{き いん じゅく} 徽音塾 2023年度

社会人向け
講座

詳細と各申込は、徽音塾ホームページ <http://www-w.cf.ocha.ac.jp/leader/kiin/> をご覧ください。

※「きいんじゅく」で検索可能です。

2023年度は、女性のエンパワーメントとリーダーシップ講座(E)、お茶大プロフェッショナルレクチャー(P)、ビジネス講座(B)各6科目です。

【2023年度 説明会】

※詳細はホームページの「お知らせ」に掲載いたします。

- 日 時：2023年3月11日(土) 午前11:00～12:00
- 形 式：Zoomで行います。

※お申し込みいただいた方にURLを事前にご連絡します。

- 参加費：無料(要申込)
ホームページトップ下部「お知らせ」→「2023年度徽音塾説明会のお知らせ」→「お申込」からお申し込み下さい。

- 内 容：①塾の概要説明 ※2023年度の特徴についてもご説明します。
②塾生の声 ③質疑応答 ④交流会

2023年度 開催概要

時 間	13:30～16:40(すべて土曜日)
形 式	原則的にはZoomを使うオンライン講座 ※PCでの受講を推奨します ※1科目から受講いただけます ※最新情報はHP、Twitterをご覧ください。



HP Twitter

<お問い合わせ・連絡先>

お茶大女性リーダー育成塾：徽音塾 事務局 E-mail: kiin-le@cc.ocha.ac.jp

【2023年度 5月～8月開催の講座】

2023年度 5月～8月開催の講座 ※1科目から受講いただけます。		
(E)	5/13	自分らしく生きる—キャリアもプライベートも自分で選択する—(木村恵子)
(E)	5/20	リーダーシップ、社会、そして私—ジェンダーと文化の視点で見えてくるもの(岡村利恵)
(E)	5/27	多様なメンバーの持ち味を引き出すチームをどう作るか(辰巳哲子)
(E)	6/3	女なら誰でもいいの？：女性がリーダーになると何が変わるか(上野千鶴子)★対面のみ(詳細は3月上旬以降に徽音塾HP「特別講演」専用ページをご覧ください)
(E)	6/17	ピンチをチャンスに！私の出産後のキャリア形成(小西雅子)
(E)	6/24	変化する時代に、私らしいしなやかなキャリアを(島津めぐみ)
(P)	7/1	私たちと地球の健康～食から地球環境を考えてみよう～(赤松利恵)
(P)	7/8	ジェンダード・イノベーションのすすめ～多様性を包摂する社会の実現を目指して～(佐々木成江)
(P)	7/15	生物の“多様性”から考える理想の未来像(鳥田智)
(P)	7/22	「貧困とは何か？」を考えてみる(三宅雄大)
(B)	8/19,26	新規事業開発に効く！イノベーション創出の知識と視点(鹿住倫世)

※9月以降にはP講座2科目、B講座5科目を開講します。



夢のつばさ♥プロジェクト

「夢のつばさ♥プロジェクト」は、東日本大震災で親を失った子どもたちを長期にわたって支援することを目的として、お茶の水学術事業会を中心としたNPO法人4団体によって進められている事業です。

2019年冬に新型コロナが発生し、「いつも通りの夢のつばさの活動まで、もう少しの我慢」と思いつつ3年が経過しました。2022年のクリスマスキャンプも、準備を整えて幸運を願いましたが流行がおさまらず、中止といたしました。申込み者もかなりの数に上って、みな期待してくれていたの、本当に残念なことでした。

2022年の冬は、東北での流行が特に目立ちました。宮城県新型コロナウイルス感染症医療調整本部 副本部長の東北大学教授が、「宮城県では、12月の半ばで、受け入れ可能病床使用率85.5%、これまでで最大の波が来ているのではないかと。医療だけを考えれば、どこにも行かない方がいい」と語ったことが朝日新聞に掲載されました。

そして夢のつばさに何度も参加している高校生男子の、身の回りの友人たちが何人も感染しているという情報が、保護者の方から寄せられました。バックアップとして、仙台開催の1日交流会も用意して会場予約もしてありましたが、こうした状況に鑑みて、中止せざるを得ませんでした。

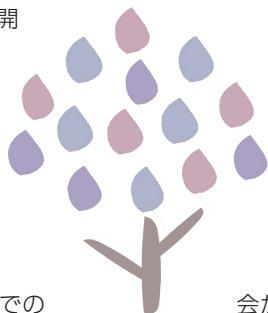
背景には、室伏きみ子先生はじめ事務局スタッフが懸念している、後遺症の問題があります。コロナ感染症から回復した後にも、罹患後症状がみられる場合があることが明らかになってきており、海外での45の報告(計9,751例)の系統的レビューでは、COVID-19の診断等の後2カ月あるいは、退院等の後1カ月を経過した患者の72.5%が何らかの症状を訴えているということです(出典:厚生労働省「新型コロナウイルス感染症診察の手引き 別冊 罹患後症状のマネジメント 第1版」)。

年齢や既往症(基礎疾患)の有無、コロナ発症時の重症度、変異株に関わらず、相談が寄せられており、若い世代や基礎疾患のない方も後遺症と無縁ではなく、コロナに罹患した全ての方に起こる可能性があるとして報告されています。後遺症として、せき、倦怠感や嗅覚・味覚障害のほか、記憶力低下、集中力低下やいわゆるブレインフォグ(物忘れ・考えがまとまらない頭にモヤ(霧)がかかったような状態)の神経症状の報告があります(出典:第88回 東京都新型コロナウイルス感染症モニタ

リング会議資料、令和4年5月26日)。人の話や書いてあることが理解できなくなる、覚えられない、決断力が低下する、優先順位が付けられない、集中力が切れるなどの症状が続きます。

オミクロン株の後遺症では味覚・嗅覚障害が出にくいものの、咳や倦怠感、ブレインフォグなどの認知機能低下、気分の落ち込みを起しやす、若い人にも子どもにも起こるという報告もあるそうです。こうしたことが起こる確率やどんな人に起こるのかは、まだはっきりしていませんが、数カ月も、もしかして年単位で、無気力になったり勉強や運動に支障をきたしたりすることが起こり得るとすれば、こんなに恐ろしいことはありません。

夢のつばさの活動は、子どもたちの幸せのため、将来の力を養うために行う活動です。参加する子どもたちや学生たちに、こうした結果を招くリスクは避けるべきという結論になりました。



事務局では、交流会で手渡しするはずだった、(株)サンリオからご支援いただいたクリスマスプレゼントの郵送作業に追われましたが、その後、プレゼントが到着したという連絡が相次ぎ、子どもたちの喜ぶ声や近況を聞くこともできました。

12月25日にはZoomによるオンライン交流会が開かれました。こうしたオンラインの活動が恒例となりつつありますが、やはり「ハードルが高い」と感じる子どもも多いようで、どうしても参加メンバーが限られてしまいます。「来年は何をしたい?」との問いかけに、「早くみんなに会いたい、みんなとおしゃべりしたい」と答えてくれた中学生女子がいて、胸を突かれました。

ご支援くださる方々からは、「なかなか直接支援ができない状態が続きますが、春を待ちましょう。皆さんもお身体をお大切に。」といったお便りもいただきます。お気持ちの優しさ、強さに励まされます。本当にありがたいことです。たくさんの方々の応援や信頼を抛り所としながら、これからも子どもたちの成長に寄り添って参ります。どうぞよろしく願い申し上げます。

(夢のつばさ♥プロジェクト)

ご寄付のお願い

【口座】三井住友銀行 大塚支店(店番号227) 普通1284200

【名称】特定非営利活動法人 お茶の水学術事業会 理事長 平野由紀子 ※夢のつばさ♥プロジェクトの専用口座です。

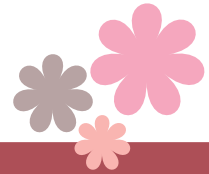
※恐れ入りますが、税金控除の対象にはなりませんので、あらかじめご了承ください。

ご寄付いただく際には、ご芳名、ご住所(連絡先)を下記までお知らせください。

連絡先:事務担当 滝澤公子 TEL&FAX:03-5978-5362 E-mail:tsubasa@npo-ochanomizu.org

お茶の水女子大学 イベント情報

2023年3月以降に開催される各種イベントのお知らせです。※いずれも参加費は無料です。



開催日時	イベント・講座名	備考
3月11日(土) 14:00～16:00	ブータン連続セミナー「映像作品を通してブータンの諸相を学ぶ」第20回『Prime Minister Visits Bhutan』(インド政府公式記録映像・1958年)	【開催方法】オンライン(Zoom) 【主催】お茶の水女子大学グローバル協力センター、日本ブータン研究所 【対象】お茶の水女子大学関係者・一般 【詳細・申込み】 https://www.cf.ocha.ac.jp/cwed/ (グローバル協力センター HP) 【問合せ】 hirayama.takehiro@ocha.ac.jp (グローバル協力センター 平山雄大)
3月19日(日) 10:00～12:20	お茶の水女子大学附属学校園連携研究「算数・数学部会」第6回統計教育シンポジウム「問題のよりよい解決に向けて統計を使って批判的に考え続ける学び」 ○附属小中高校における最新の統計教育の実践発表 ○講演「算数・数学科と統計教育」 【講師】 長尾篤志氏(東京学芸大学特命教授、前文部科学省主任視学官)	【開催方法】オンライン(Zoom) 【主催】お茶の水女子大学附属学校園連携研究「算数・数学部会」 【共催】お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所 保育・教育実践研究部門 【詳細】 https://www.ocha.ac.jp/event/d011706.html 【申込み】要事前申込(3/16まで、当日申込なし) 【問合せ】 info-iehd@cc.ocha.ac.jp (人間発達教育科学研究所事務局)
3月21日(火) 14:00～16:50 ①全体会・研究発表 (ライブ配信)	第7回 お茶大子どもフォーラム(オンライン開催) ①全体会・研究発表 【登壇者】 小玉亮子、松島のり子、辻谷真知子、内海緒香、柿沼平太郎、 刑部育子、宮里暁美、浜口順子ほか	【開催方法】オンライン(Zoom) /一部オンデマンド開催 【主催】お茶の水女子大学保育マネジメント研究会 【後援】お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所 【詳細】 https://www.ocha.ac.jp/event/d011580.html 【申込方法】オンライン・オンデマンド配信共に要事前申込(3/15まで) https://bit.ly/ochadaikodomoforum7 【問合せ】TEL:03(5978)5127(文京区立お茶の水女子大学子ども園)、E-mail: kodomo-forum@cc.ocha.ac.jp (子どもフォーラム専用)
3月21日(火) 17:00～ 4月23日(日) ②分科会 (オンデマンド配信)	②分科会(オンデマンド配信による話題提供) 【登壇者】 3園合同研究会メンバー、藤吉陽子、川島雅子、松本春野、 宮里暁美、鮫島良一、杉浦正衛、宮里耕太	【問合せ】TEL:03(5978)5127(文京区立お茶の水女子大学子ども園)、E-mail: kodomo-forum@cc.ocha.ac.jp (子どもフォーラム専用)
3月26日(日) 14:00～15:30	第37回 リケジョー未来シンポジウム 【講演者】 角佳奈子(ハウス食品株式会社) 杉井昭子(日本エア・リキード合同会社)	【開催方法】ハイブリッド(お茶の水女子大学本館306室&オンライン(Zoom)) 【主催】お茶の水女子大学理系女性育成啓発研究所 【対象】女子中学生・高校生、保護者、教員、女子大学生・大学院生 【詳細】 http://www-wf.ocha.ac.jp/cos/ 【申込み】HP内の専用フォームにて 【問合せ】 ocha-cos-office@cc.ocha.ac.jp



イベント参加レポート

お茶の水女子大学「伝統芸能×未来」プロジェクト

「中村蒼玉と歌舞伎」

2022年12月17日13:00～15:00

於：国際交流留学生プラザ多目的ホール

歌舞伎役者の家に生まれたわけでもないのに26歳にしてすでに芸歴15年、しかもお母さまはお茶大の卒業生という、異色にして新進気鋭の歌舞伎役者中村蒼玉(かんぎょく)さんのトークイベントに参加しました。何度か拝見した情感あふれる可愛らしい女形の舞台からは想像できないようなトーク、質疑応答での利発さ、奥深さに驚き魅了されました。

「老婆心ながら歌舞伎の将来を憂える」というコメントに対し、現代の私たちには遠くなったけれど捨て去るには惜しい江戸時代から伝わる情緒、人の生きざまなどを、「腹で捉え咀嚼して舞台

で表現するならば、現代に生きる歌舞伎としで伝わるはず」と、良い意味で蹴散らしてくれました。凄い役者が現れたものでございます。

参加者はお茶大生が中心でしたが、中には歌舞伎の将来について考えている附属中学生もいて、正に「伝統芸能×未来」のひと時でした。今後、このプロジェクトがどのように展開していくのか、ますます楽しみになりました。

(お茶の水学術事業会 古庄)



「伝統芸能×未来」プロジェクト(JPAF)の情報は下記サイトをご覧ください。

<https://www.cf.ocha.ac.jp/dentogei/index.html>

桜蔭会よりご案内

■ **桜蔭塾** <http://www.ouinjuku.com/>

懐かしいお茶大の先生方や、桜蔭会会員の方を講師に迎え、オンラインでお話を聴く、会員と在学生のための学びの場です。



2023年3月以降に開催予定の講座 [Zoom](#)

開催日時	講師	テーマ
3月25日(土) 14:00～15:30	シーラ クリフ氏 (着物研究家)	「着物にみるファッションの歴史」
6月17日(土) 14:00～15:30	松尾 葉子氏 (指揮者)	「夢の実現を願い続けて」
7月29日(土) 14:00～15:30	上垣内 伸子氏 (十文字学園女子大学 教授)	「乳幼児期からの子どもの権利について 考えてみませんか」

新企画

卒業生のキャリアトーク
～20代・30代の同窓生に聞く～

司会：五戸 美樹 アナウンサー

5月20日(土)

14:00～15:30 Zoom

お茶大(水村研究室)とコラボ企画

桜蔭塾「オンラインダンス教室」

月1回 火曜日 11:00～12:00

Zoomを活用して気楽に、楽しく身体を動かしてみませんか?

日程・詳細は桜蔭塾HPで

就活応援・「ZoomでOG訪問」 **新規アドバイザー登録大歓迎!**

学生さんお申し込み&OGアドバイザー募集中!

桜蔭会の新プロジェクト、在校生向けの就活応援「ZoomでOG訪問」がスタートしました。お茶大を卒業した先輩に就活や入社後のことを聞いてみませんか?

【登録のOGアドバイザー】

編集者・美術館学芸員・弁護士・文系研究職・
理系研究職・国際機関職員・一般企業・公務員・
キャリアコンサルタント など

学生OG訪問
お申込み



OGアドバイザー
ご登録



お茶の水学術事業会 共催講演会のご案内

■ **お茶の水地理学会講演会**

「占領下沖縄における学校教育の再開と復興」(仮)

講師：萩原真美氏(聖徳大学大学院教職研究科准教授)

日時：6月土曜日で調整中

会場：お茶の水女子大学 学内講義室を予定

講師の萩原真美氏は博士論文をもとに著書『占領下沖縄の学校教育』を出されています。本講演会でも、占領下沖縄で学校教育がどのように変遷してきたかをわかりやすく語ってくださいます。お茶大地理学科卒業後、2度の社会人院生、4つの職業を経て研究職に就かれたという経験をお持ちです。



※入場無料・要予約(一般公開、先着50名)

※詳細が決まり次第、下記URLにて情報を更新し、お申込みを受け付けいたします。

【一般用申込みフォーム】

<https://forms.gle/fCZgoncLXsTaqG3x8>

【問合せ先】

お茶の水地理学会事務局メールアドレス

chiriog@yahoo.co.jp

みなさまのご参加をお待ちしております。



お茶の水学術事業会よりお知らせ

1. 2023年度 共催講演会・助成金事業を募集しています!

<https://www.npo-ochanomizu.org/kyousai.html>

【対象となる事業期間】2023年4月1日～2024年3月31日

【申請受付】2023年4月1日～5月31日

○ 共催講演会—参加予定人数が50名以上の講演会が対象となります(オンライン、ハイブリッド開催を含む)。

○ 助成金事業—以下の事業が対象となります。

- (1) 学術・調査・研究・教育等の活動
- (2) 学術関連等の出版事業
- (3) 国内及び海外におけるボランティア活動
- (4) 国際協力研究・教育支援事業
- (5) 保育及び子どもの健全育成のための活動

2. お茶の水グッズを通信販売しています!

<https://www.npo-ochanomizu.org>

・HPの注文フォーム、メール、電話、FAXでご注文を受け付けます。

・日本全国に配送いたします。※送料は実費をいただきます。

詳細はHPをご覧ください。



品名	定価(税込)
お茶大ゴルフ	648円
一筆箋	396円
クリアファイルA4	132円
クリアファイルA5	110円
絵はがき	88円

【ご連絡・お問合せ】お茶の水学術事業会事務局 Email: info@npo-ochanomizu.org TEL・FAX: 03-5976-1478 (月～金 10時～16時)

編集後記

多くの方々のご協力のもと当事業会は設立20周年という節目を迎えることができました。一方、室伏先生の“お茶の水”歴は50年!生徒、学生、卒業生、教授、役員、これほど多様な立場で母校と関わる方というのはあまりいらっしゃらないように思います。貴重なご経験談です。

広告募集

このページに広告を掲載しませんか?次号は2023年6月に2500部発行予定です。会員の皆様ははじめ全国の公共機関などに配布しています。広告料金は、1回につき20,000円。詳しくは下記までお問合わせください。

事務局

OPEN 月～金 10:00～16:00

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学 理学部3号館 204
TEL&FAX 03-5976-1478 E-mail: info@npo-ochanomizu.org
<https://www.npo-ochanomizu.org>

※会員の方は、お問合せの際、会員番号をお知らせください。会員番号は封筒の宛名ラベルに印字してあります。



◆事務局所在地

東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学
理学部3号館204

◆交通機関

地下鉄 丸の内線

茗荷谷駅から徒歩7分

地下鉄 有楽町線

護国寺駅から徒歩8分

都バス

大塚2丁目バス停すぐ